

旅をする、自分を見つめる、心と体をととのえる。(1)

札幌いちご会理事 登り口 倫子 (のぼりぐち みちこ)

「いててて…」恐竜のウロコが生えてきたように、背中がズキズキと痛み出す。今年の春を迎えた頃、相談員の仕事を退職せざるを得ないほどに。ふと考えると、6月には34歳を迎え、先輩に怒られますが、あともう34歳足すと68歳。「折り返し地点だ。今と同じような生活をしていたら、心も体ももたないな…」と、思い切って自分だけのことを考えた「旅」をすることにしました。6月は3泊4日で東京、9月は4泊5日で大阪に滞在。私は長い旅をするとき、札幌からのヘルパーは一人だけにし、あとは現地のヘルパーやボランティアを探します。その場の新しい人との介助に耐えられる体である限りは、現地で介助ができる知り合いを作るために続けたい方法です。

旅の中で、東京で電動車いすを専門に作っている「さいとう工房」さんとの出会いが大きな感動でした。障がい当事者と月に一度勉強会を開き、本人の声を逃しません。「車いすは、(仮面ライダーのような)モビルスーツだ。」と話す職人さん方は、目と汗を輝かせながら、足首・座面・背中^のの角度を自由自在に動かすことができ、道路の段差を越えるときの「ガクツとした振動」をほとんど感じさせない電動車いすを作ったのです。実際に乗ってみると、自分で全身を動かすことができるので、ガチガチに張った腰や背中を休ませたり、ぶくぶくにむくんだ足の血流を良くしたりできました。そして、外を歩いていても、並んで歩いている人との話に夢中になれるほど、段差にビクビクせず、快適に「歩いている」ような感覚でした。費用は150万円以上で、東京では100数万ほど公費で出るそうです。働いて稼いで、たくさん社会のために発言し、自分のために体を休めて、良い表情でたくさんの人と出会うには、このようなスーツが私には必要だと思いました。妥協せず^に、獲得する方法を真剣に考えていかなければなりません。



さらに、札幌での障がい者運動がいかに足りないかを思い知らされました。東京も大阪も、その近辺もJRや地下鉄、バスはほとんど待たされることなく、スムーズに利用できるのです。京都の日本自立生活センター(JCIL)では、交通局と年1回以上は交渉の



左からJCIL 油田さん、大藪さん、岡山さん、立命館大学の研究員の河合さん

場を作っているように、厳しい眼差しを送り続けなければ、相手も「これで良いや」と緩んでしまうのでしょうか。予約が当たり前という態度をとる札幌のバス会社はおかしかったのです。関西の大学は障害学生支援制度が進んでいるせいか、大学院も目指す当事者が多い気がします。知らないうちに社会や環境に合わせてしまっている自分がいました。まだまだ私たちの手で「人生の選択肢」を広げていかなければならない時代のようなようです。